特280-15
1200501132468
特280
15
11枚

工藝淸玩

第一輯
蒔繪と金工

大正
14.12
内交

始

工藝清玩　第一輯

蒔繪と金工

目次

一古今和歌集硯箱蓋表　京都妙法院所藏
一　同　蓋見返　同
一　同　見込　同
一桐鳳凰模樣隅赤箱甲　同
一　同　側面　同
一色漆繪丸盆　京都某家所藏
一色漆繪丸盆　京都某家所藏
一御車裝飾金具波龍　京都今宮神社所藏
一　同　松虎　同
一　同　梅に朱雀　同

以上

古今集歌本蒔絵硯箱

京都妙法院所藏

從七寸一分　横五寸二分　高サ一寸五分

右來の蒔繪は德川時代初期に於て大体三分し其一は江戸蒔繪となり其二は京蒔繪となり其三は加賀蒔繪となる三流各特長を有す然して江戸蒔繪の代表を幸阿彌長重とし京蒔繪の代表を山本春正とし五十嵐道甫を以て加賀蒔繪の代表となす幸阿彌家と五十嵐家は世々時の天下の用を務めしを以て最も傳統重き名家たり天下將軍家の用を奉する両家の作品は自から官僚風を帶ぶるに至る山本家其他の京蒔繪は然らず幸阿彌家が江戸將軍に仕へ五十嵐家の前田利家に仕へて加賀に移るに至りて益々此風を發揮せるものゝらしく特に五十嵐家に至りては地方的に片意地となり技巧は益々精巧にたれりとはいへ何んと無く無趣味なる千篇一律的なるに思はるもの之を加賀蒔繪と稱す。

本體は幸阿彌家の大作初音の蒔繪に類するが故に或は幸阿彌家の作と見らるれど仔細に視るに如何にも東山時代の風と武張りたる地方的趣味の濃厚を感ずるが故に加賀蒔繪則ち五十嵐一家の作品と思はる

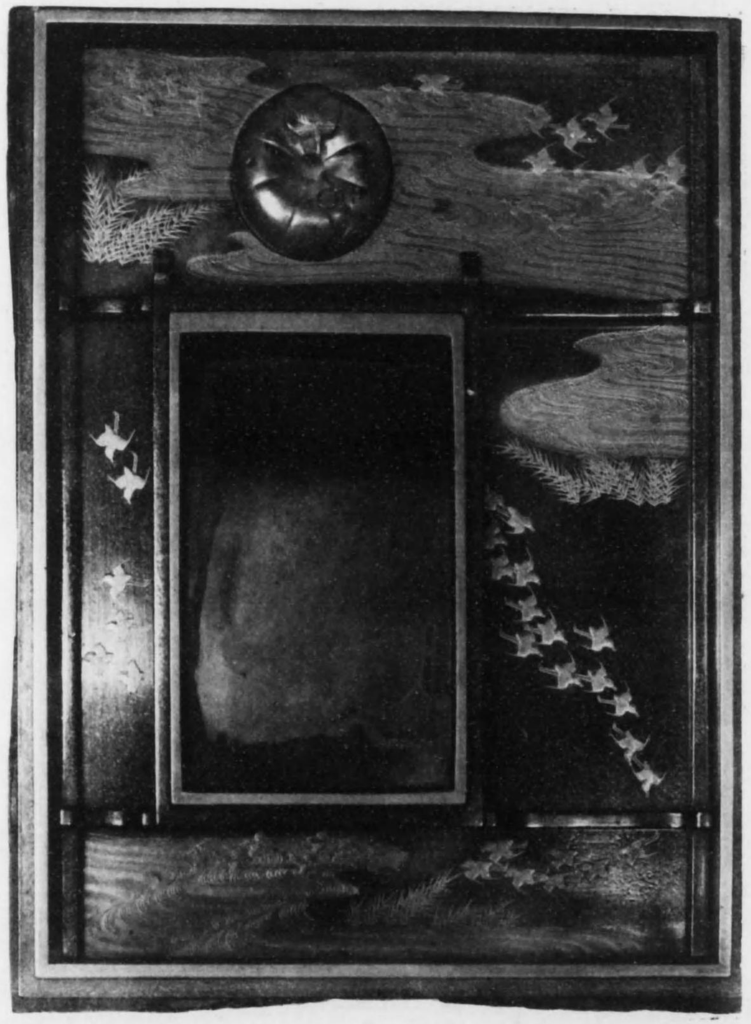
意匠は硯箱全体を古今集歌本の委にとり古今集序文の文字を芦手書きに文意を表し總体東山時代より余り進歩せざる手法を平目地高蒔繪となす然し此表面の平目地は置平目と稱する一粒づつ置きたる手法は此時代より始りたるものなり

古今集歌本蒔絵硯箱　蓋見返

從七寸一分　横五寸二分　高サ一寸五分

京都妙法院所藏

深古會藏版



古今集歌本蒔繪硯箱　見込

從七寸一分　横五寸二分　高サ一寸五分

京都妙法院所藏

御書會藏版

桐鳳凰蒔繪隅赤文庫　甲面

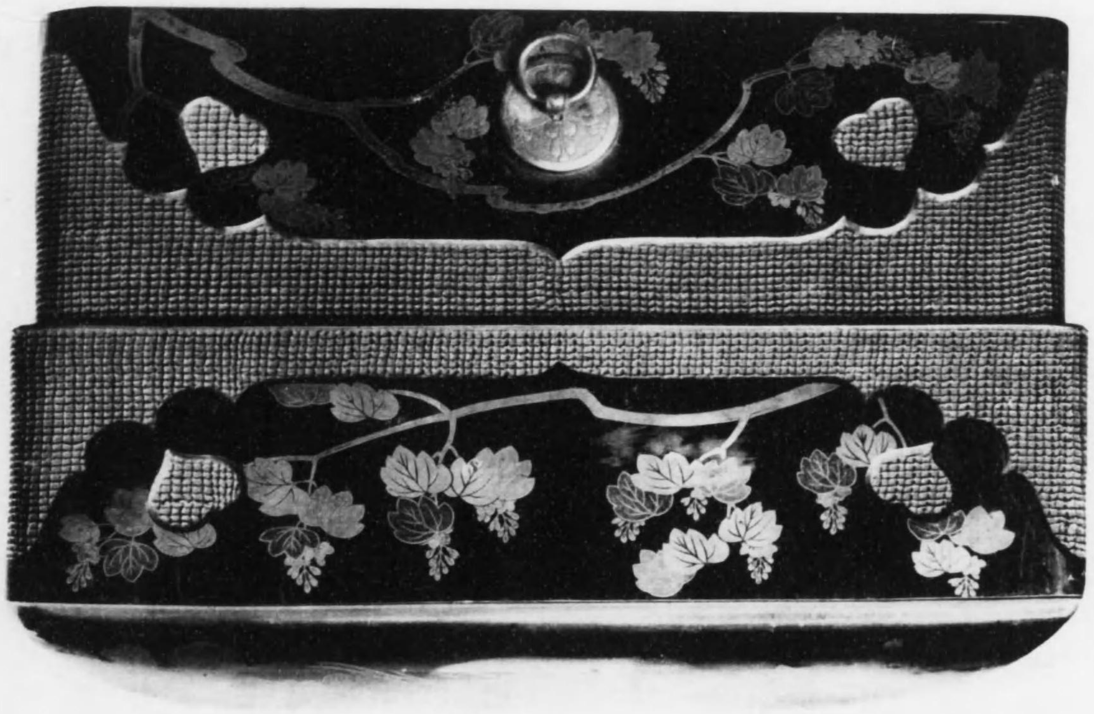
從一尺二寸二分　横九寸三分　高サ八寸三分

京都　妙法院　所藏

此文庫の蒔繪は高臺寺蒔繪の一種とす

高臺寺蒔繪は主に狩野山樂一派の圖按に成るもの多く蒔繪の手法は至極單純なるものにして行程早きものなり蓋し當時の必要上念作をなしあたはざりしによるもの同時に蒔繪師の藝術的器量に至りてはいづれも驚くべきものなり後世茶人の推賞する所以なり

帝室博物館藏



桐鳳凰蒔絵隅赤文庫　側面

從一尺二寸二分　横九寸三分　高サ八寸三分

京都　妙法院　所藏

淨法寺蒔繪丸盆

直徑一尺二寸三分

京都某家所藏

本圖は淨法寺蒔繪後期の作品なり

經世會藏版

輪花式淨法寺蒔繪盆

直徑七寸三分

京都某家所藏

此淨法寺蒔繪盆は鎌倉後期足利頃の作品なり

國宝會複製版

御車装飾金具　一部

菅次作　波に龍

巾五寸　長六寸三分

弘化三年婚所の仕人医師村菅次が今宮
神社のために作りしものなり

京都　今宮神社所蔵

宮内省圖書寮

御一

江戸金箔置

漆塗中御

管次作　鍬に彫

中嶋ナ　民ニ　ニス　五ヤス

弘化三年藤原の住人奥村管次が今宮

神社のために作りしものなり

京都　今宮神社所蔵

御車裝飾金具　一部

梅に朱雀

高サ　六寸
巾　尺二寸五分

本輯に掲ぐる音次作祝虎模様金具ミこも
に今宮神社の所藏にて作者不詳なり

京都　今宮神社所藏

終

大正十四年八月二十日印刷
大正十四年九月一日發行

著作者　溫古會
發行兼印刷者　中島榮三朗
寫眞撮影　中島京桑社寫眞部
京都市東堀川九太町下ル
發行所　溫古會